

◎ 特 集 ◎

最 後 の 冬 山

—四十を前にして—

1988

(12月) 四方立夫

探検部の精神に弾かれて

最後の冬山

肩の付いた羽織。吹き飛ばされそうな羽織を
とるえ。一歩一歩歩いて行く。一歩引けて休憩。
すべての危険をおおい隠すやさしさを持つ雪と。
その雪もよせつけず必死さを感じさせる様に動く

I. 最 後 の 冬 山

—四十を前にして—

に久々に登ってみたいとなった。もう、ちょうど
12月15日

II. ブータンからクスザンポー

—ブータン紀行—

雪も降り、山も白く、雪も降り、山も白く、雪も降り、山も白く、

III. 漂 流 記

—タクラマカン砂漠カヌー遠征—

は、廻りの山に雪がから「大雪に変わった」「三十

IV. そしてこれから

—ユーコン河全流航行—

いる物は無かった。しかし船主という文字は河

か違う。今度は廻りの山中は何も言わないが、

自分自身にもくものしかかるものがある。明らかに

た人生のター

す体力的な野

望みは、おそ

いられないほどで進んでいくのだった。それ

でも、その時その時の体りに応じて、彼等を越

えても正月に山に登るかも知れない。しかし、

それはマントはおちか、寝袋も乾かない小国

よりの冬山となる。決して「現役」とは呼ばれ

る冬山ではない。

ハードな冬山は、今年冬のこの冬が最後の
チャンスになる。

幸いこの一年は、スキーや実習での白馬越え
登山も入れて、年間40日の山行日程をこなして

もやった。3段
200mといわれる滝を一人秋田に打たれなが

つくよれた所沢に

あててた。まるで見えない黒い山の奥

2つの滝には

てアッセルを

やった。たいそうたのしみである。そして那

代感もなくなった。

多くの現役を生んで渡り色がそこにあ

る。おじいちゃん

られながら、一人現役についた。

でも、その時その時の体りに応じて、彼等を越

えても正月に山に登るかも知れない。しかし、

それはマントはおちか、寝袋も乾かない小国

よりの冬山となる。決して「現役」とは呼ばれ

る冬山ではない。

現役をはなれても、遠征にはできなくても、根底に流れるもの
まぎれもなく探検部の精神である。

人各々がっててもやはり探検部の精神なのである。



最後の冬山

—四十を前にして—

1988

(12代) 四方立夫

最後の冬山

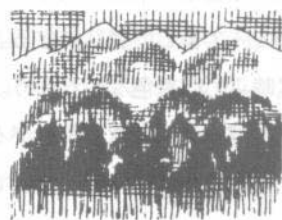
雪の付いた岩稜、吹き飛ばされそうな裂風をこらえ、一步一步攀って行く。一夜明けて快晴。すべての危険をおおい隠すやさしさを持つ雪と、その雪をよせつけず絶悪さを誇示する様に黒く光る岩壁。そして抜ける様な碧空。そんな冬山に久々に登ってみたい。もう、ちょうど10年間正月登山はやっていない。

思えば俺も来年で40才になる。30才になる時は、廻りの若い連中から「大台に乗った」「三十路」だと言われたが、本人にはほとんど何も感じる物は無かった。しかし40才という数字は何か違う。今度は廻りの連中は何も言わないが、自分自身に重くのしかかるものがある。明らかに人生のターニング・ポイントであろう。そして体力的な努力では維持する事はできず、その衰えは、おそらく経験や技術でおおっても、覆い切れない速さで衰退していくのだろう。それでも、その時その時の体力に応じて、40才を越えても正月に山に登るかも知れない。しかし、それはテントはおろか、寝袋も要らない小屋泊まりの冬山となる。決して「現役」と呼ばれる冬山登山ではない。

ハードな冬山は、今39才のこの冬が最後のチャンスになる。

幸いこの一年は、スキーや家族での白馬越え登山も入れて、年間40日の山行日数をこなしている。夏には釜を泳ぐ溯行もやった。3段260mといわれる滝を一人秋雨に打たれながら攀っても行った。開拓しつくされた円沢にあってなお、まるで記録の見ない最西端の流域の沢に、数本の足跡を残し、2つの滝にはピトンを打って直登して行った。12月の初めには、会社の新しい山仲間と八ヶ岳でラッセルをやった。たいそう充実した年である。そして30代最後の冬になった。

多くの栄光と悲劇を生んだ奥又白がどこにあるのか、正直なところ、この20年間知らなかった。そんな岩登りのメッカ奥又白谷で、幾つかのレリーフに守られながら、一人就寝についた。



慶応尾根

12月28日(月) 快晴

出発(7:30) 慶応尾根 2150m コル(9:20)

北尾根八峰(11:30~12:30) 七峰(13:10)

六峰(14:20) 5・6のコル(14:30)

四時半起床し、六時すぎにテントから這出す。暖かい。今日も雲一つない快晴だ。風も無いのか、稜線には雪煙も舞っていない。リーダー以外は若い5人組の「元気パーティ」が足取りも強くテントの横を通って行く。これで先行するのは、2パーティ、10人となった。もうラッセルの心配は無い。有難い。

暫くは、沢底にへたくそなトレースが続くが、慶応尾根2150mのコルに出ると径はすっきりする。反面傾斜は増し、雪壁状をあえぎあえぎ登ると、2470mのコブに出た。すでに森林限界は越え、眼指す北尾根の前穂から屏風の頭^{カシラ}までの全貌が開ける。正面にスッパリ切れ落ちた前穂の東壁を形造る様に、三峰のリッジが3・4のコルに落ちている。雪のつかない黒々とした大きな、四、五、六の岩峰が碧空に突きささる。七峰でようやく雪をまとい、たおやかな八峰へと続いている。いつまで見ていても見飽きぬ景色の中で一夜を過ごしたのであろう、ブロックを積んで設営した後がある。これで先行パーティは3パーティという事になる。

きれいな一条のトレースが八峰へと続いている。見上げると常に頭上に八峰は見えている。それがかえて苦しい登りになる。

余程素晴らしい景色なのだろう。すでに八峰に立つ先行パーティの歓声があがる。俺も早く見たい。はやる心に重い足はついて行かない。

相変らずうつむいたまま、ゼーゼーいっている。

ドサッとこける様に荷物を置く。凹地を越えて、八峰の頭に立つ。壮観。複雑に重厚な北穂高のむこうに麗しのマドンナ、槍ヶ岳が聳え、北アルプスの中央部から北部の山々が、銀色に輝く峰々となって幾重にも続いている。足元、溜沢は滑らかにすべり落ち、こんなに登って来たのに、奥穂高は威圧するかの如く、まだまだ高い。

これより北尾根は少し下り、雪のナイフエッジとなった三つの小さなコブを越え、白く丸い七峰へと続く。その先、六峰は雪の白と岩の黒が半々の長大なリッジとなって、頭上はるかに突き上げている。とても今日中に越えて行ける大きさではない。次の幕営可能地点は、この六峰を越えた5・6のコルだ。中途半端な時間になった。

頑張りすぎた為、殆んど食欲のない胃袋にパンを押し込みながら、前進か設営か、思案する。1パーティはすでに凹地に設営を完了し、もう一つの朝テントの横を通りすぎて行った「元気パーティ」は、アイゼンを履き、ハーネスにカラビナをぶらさげ、登攀体制を整えている。どこまで行く気なのか、リーダーに聞いてみた。

「すぐその5・6のコルです」という返事が返って来た。

「エッ?! あの大きなピークが六峰では?」
「いや。私達もここは初めてなので保証はできませんが、あの大きなピークは五峰ですよ」
「だったら俺にも5・6のコルまでは楽なものだ。登攀具は必要なさそうだが、せめてアイゼンは

付けよう。

ナイフ・エッジの七峰は10分後に通過し、六峰の雪稜の登りでザイルを出している「元気パーティ」に追いついた。八峰に設営していたパーティのうち3名も追いかけて来た。2名を八峰に残して、3名だけが前穂にアタックするという。常に何かを喋り、常に体を動かしている「がさつパーティ」だ。ザイル工作中的の「元気パーティ」を「がさつパーティ」が追い越して行き、結局この六峰の登りで、俺はしんがりをおおせつかった。六峰の頭は雪のまるいピークだ。ここで「がさつパーティ」は小休止の為、オーダーは又元に戻った。六峰の下りのコルに出る所で「元気パーティ」は10m程の懸垂下降をしている。涸沢側の岩と雪のコンタクト・ラインをからんでコルに出られそう。荷を置いてコルまでステップを掘る。荷を岩にあててバランスを崩すと涸沢の底まで一気に持って行かれそう。

コルから5m程の岩登りとなるがホールド・スタンス共豊富にある。

小さな雪のコブを越え、涸沢側からトラバース気味に5・6のコルに出た。と思いきや、そこは数名が休憩するのも狭く、奥又白側にもスッパリ切れ落ちたコルである。「アレ?! ここが5・6のコルのはずでは?」。「いやー先程、地図で確認したのですが、この上が六峰です。私達はここで紅茶休止です。」とはよく言ってくれたものだ。

結局、八峰から見上げていた行く手を遮る様な大きなピークが六峰で先程、六峰だと思っていた雪の丸いピークが七峰だ。今更もう八峰

へは引き返せない。2時間かかろうと、3時間かかろうと、重い荷を背負って、六峰を越えるしかない。2名がザイル工作し、3名で紅茶を作っている。この「元気パーティ」も、ここを5・6のコルと思って登って来たのだろうかパーティを組んでいるだけに悲愴感がない。

トップが15m頭上で一つ目のランニング・ビレーを取って、更に高度をかせいで行く。「元気パーティ」は前穂の往復が目的だという。「一人で西穂まで行くのですか。爪のアカでも煎じて飲みたいな」という若者の言葉に元気づけられ、トップを追う。

ホールドは大まかで、雪の状態も不安定だ。傾斜が強く、途中で立ち止まって呼吸を整える所がない。呼吸と動悸と足の動きにまるでリズムが取れない。「元気パーティ」のトップが40m一杯のところでジッフェルを取り終えた時、追いついた。それより次第に傾斜は落ち、歩きやすい雪稜になる。とはいってもザックを置いて休める程の傾斜ではない。しっかりシャフトを突きさし、前かがみになって丸めた背中にザックを乗せて、肩を解放して呼吸だけ整える。

少し落ちつくとも100m程の雪稜を一步一步ゆっくりと登って行く。雪稜が再び岩稜に遮られるが、頭に近いのか傾斜はそれ程ではない。ふらつく様に辿り着いた六峰の頭は広い。もう景色を楽しむ余裕など、どこにない。這松に足をうばわれながら5・6のコルに下った。

昨日、慶応尾根の2470mのコブに幕営した3人パーティのみが、設営していた。「ゆっくりパーティ」だ。後続2パーティの露营地を残して整地を始める。

昨夕の奥又白谷では入らなかったラジオの気象通報が、今日は聞こえる。10数年ぶりに天気図を取った。

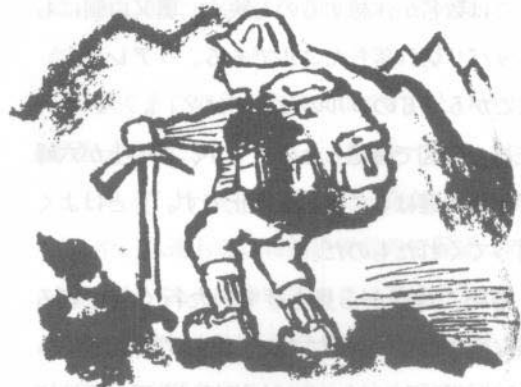
陽がかげると風が出て来た。余りにも強い風だ。それに比べてテントの張り方が実にいい加減にしかしていない。細引を何本も持って、あわてて飛び出した。

夕食に乾燥スキ焼を作った。臭はいいが、一口、二口食べるとムツと吐きそうになる。結局、飲み物しかのどを通らない。雪の単独行の時は、頑張りすぎるからか、いつもこうだ。白馬も、北鎌も、硫黄尾根も、ハツの天狗尾根も、みんな食事が喉を通らなかった。今回も勿論、覚悟はして来ていた。しかし、まさか二晩目にしようとなるとは思っていなかった。もう一日は持つと思っていた。いや、もう一日持てば自信を持って下山できるといった方が正しい。やはり今日は八峰で停まるべきだった。今更どう思ってみても仕方がない。明日の行動を決めねばならない。観天望気も天気図も、明日の好天は約束してくれている。ならば、明日中に勝負をしよう。地図を読み、行程を決める。この北尾根の各ピークを一時間づつで越えて行く。

すなわち、この5・6のコルを7時に出、4・5のコルは8時。3・4のコルに9時。本峰10時、吊尾根は2時間で、奥穂到着が12時。そして一気に西穂を越えて、西穂山荘に16~17時だ。

極力荷を軽くして、明日中に、前穂・奥穂・西穂を越えて森林帯の山荘まで長駆する。六峰の登りでさえ耐えがたかったこの重い荷物を処分しよう。明日、かついで出るのは4日分の燃料と2日分の食糧だ。残りの4日分の燃料と3日分の食糧は、ここに置いて行く。

外はあいかわらずの裂風がテントを叩き、いつつぶされるのか、と恐くて眠れない。ようやく静かになって眠りについたの23時半だった。それも束の間、バンというテントを破られた様な音で飛び起きたのが、2時半。それ以後、テント撤収まで吹き止む事はなく一睡もさせてもらえなかった。



長 駆

12月29日(火) 快晴

5・6のコル出発(7:10), 五峰(7:40),

四峰(8:40), 三峰(11:15~11:30),

二峰(11:40), 本峰・前穂高(12:00~12:05),

奥穂高(14:30), コブ尾根の頭(15:50),

天狗のコル(16:40)

勝負を賭ける日が明けた。とは気合いばかりで、「元気パーティ」は暗がりの中を5時に出発し、少し明るくなって「がさつパーティ」と「ゆっくりパーティ」が出て行った。更にもう一組、四峰正面壁か前穂東壁をねらうと言っていた「壁パーティ」が出て行き、俺が最後の出発となった。

幕営地後に「壁パーティ」のみが、きちっとブロックを積んで防風を施こしていた。さすがだと思ったら、全く逆で、昨夜テントを潰され、壁の登攀も諦めて、俺と同じ、西穂山荘まで目指すという。

五峰の登りは雪まじりで簡単だが、いきなりの急登に、早くも呼吸が乱れる。

五峰のピークから見ると、次の四峰はやはり大きく、上部2/3の露岩が、いやらしそうだ。2時間も前に出た、空荷の「元気パーティ」がまだ、その突破に難渋している。

五峰から4・5のコルへは少しの下りだ。

コルから四峰へは岩稜を進み、途中から奥又白側の不安定な雪壁を登って上部露岩の基部に出る。雪が多ければ、そのまま奥又白側を進めるのだろうが、今はこの10mの露岩を登るしかないさそうだ。「壁パーティ」のミッテルに入れてやろう、という好意に甘えてザイルに結ば

れる。更に岩稜は続き息を抜けない。左手、奥又白はリッチとルンゼが入り組んで、まるで読めない地形をなしている。それに較べて、右手の涸沢は何と単純な圈谷か。スパッと、底まで切れ落ちている。

やっと四峰に立つと、またもや三峰が行く手にそそり立つ。明らかに一番手強そうなりリッチだ。

3・4のコルへはガレを下って行く。

三峰へのリッジには「ゆっくりパーティ」が取付いているが、余程難かしいのか4人全員でミンミン鳴いている。少しも進まないのだから先に、行こうとしたが荷が重すぎて登れない。とうとう俺もザイルを出す。赤の9mm20mザイルだ。10数年前、40mザイルを買ってYと二人で分けた。以後、二人で山行を同じにする事がない淋しい片割れのザイルだ。

ザックをピトンにジッフェルし、空荷で登る。20m一杯に登ってザイルを固定し、元のザックの所へ8環で懸垂下降する。8環はドッペル用にできているので、シングル・ザイルでは安定が悪い。またザックをかついで登り直す。

三峰登りの中央部のチムニーに入る。

チムニー上部で「ゆっくりパーティ」がまた苦闘している。余りの登りにくさを見て、再びザイルを出す。「ゆっくりパーティ」の動きの悪さに、皆業を煮やしたのだろう。結局この狭いチムニーの中に4パーティのザイルが並行した。チムニーを出ると広いテラスに出た。ここで空荷の「元気パーティ」が本峰の登頂を終え、トップが懸垂で戻って来たので5パーティ全部が一緒になった。

懸垂で下って来た3人目は、昨日「爪のアカでも煎じてウンメン」と言っていた若きクライマーだ。その彼が、ジッと俺を見ている。それは自分が登頂終えた満足の眼でもなく、俺に西穂まで頑張れという励ましの眼でもない。まるで俺が直面するであろう不幸でも予知しているかのような、あわれみの眼だ。じっと見ていて動く気配が無い。気になるが無視する他に手はない。

「壁パーティ」と俺だけが、そのまま休まず三峰を目指す。もうザイルは要らない。涸沢側を巻く様に三峰に出た。今までは登攀の緊張が疲労を忘れさせていたが、平な所に出ると、思ひ出した様に苦しくなる。

風は少しあるが、テルモスを出して休憩する。カロリー・メイトを食べるが、やはりムツとして喉を通らない。

2・3の科尔というのは無い。三峰よりそのまま雪のナイフ・エッジに取り付いて二峰に出る。二峰から本峰に登るには少し下らねばならず、科尔に出る5mの懸垂は、「がさつパーティ」のザイルを借りる。科尔から再び雪のナイフ・エッジをあえぎあえぎ登って行くと、南北に長い本峰・前穂高の頂上だ。

ひっくり返る様に荷を置く。

前穂は360度の大大パノラマが展開する。

過去に5回は登頂している。俺の好きな、数少ない頂きの一つだ。

空荷になっても足元はふらつき、動き廻るのは危険だ。

道標の横に掘りかけた雪洞の跡がある。積雪は優に2mは越えている。

今、登って来た北尾根を振り返る事も、麗峰

・槍ヶ岳を眺める事もなく、ただこれから向う奥穂高から西穂高への、鋸状に幾つものピークを持つ主稜線と、もう来る事もないはずの明神岳を観察し、早々とザックをかついで、吊尾根へ下降を始めた。

下降ならもっと速く歩けるはずだが、呼吸のリズムを乱さない様、一步一步ゆっくり確実に進んで行く。最低鞍部からの登りも同じ調子でゆっくり登る。しかし、下りと違って呼吸は乱れ、何度か立ち止まって息を整える。もう計画を打ち切って、このまま岳沢へ下って行きたい。何度もそんな衝動にかられながら吊尾根を進む。

ここは北尾根と違って、夏径があるだけに緊張感も傾斜もない。その分歩き易い。最後は半病人の様な弱々しい足どりで奥穂高に辿り着いた。

もうこれ以上高い山は北アルプスにはないんだと、言いかせる様に自分の頑張りをねぎらってやる。

思えばこれで三度目の登頂だ。いづれも雪の時期に、前穂から吊尾根を渡ってやって来ている。

山頂には、つい先程、俺を追い越して行った二人組が休んでいる。昨日、屏風岩を登り、今日はその頭から、ここまで飛ばして来たという。

これ程急いで来たのは、明日は前線通過で荒れそうなので、今日は白出の冬期小屋にもぐり込む為だという。たしかに前線は、もうすでに白山から南東へ南アルプスまで延びている。この二名が白出の科尔へ下って行くと入替りに「壁パーティ」がやって来た。彼もまた、予定どうり西穂を目指すべきか、白出の冬期小屋へ逃げ込むべきか迷っている、という。

二組のパーティに同じ事を言われると俺だって悩む。荒尺を迎え打つのは小屋がいいに決まっている。ただそれ程荒れるとは思えない。それに一度白出の科尔にまで下ってしまうと、もう再びこの奥穂まで登って来る体力が無い様な気がする。それは計画の失敗を意味する。

西穂高を目指す。

馬、背、ロバの耳、ジャンダルムと有名な難所が続く。

過去2回の奥穂登頂は、いつも白出の科尔から涸沢に下りている。これからの難所は未知のルートになる。どれ程の難所か、いざ来い、と気合を入れると、元気も出て来た。

まず最初の馬の背は、なだらかなガレを下って行く。そしてロバの耳の科尔に向けて急激に高度をさげる。三点確保を必要とする程の急傾斜の事よりも、正面の奇峰・ジャンダルムがみえるうちに高くなって行く方が気がかりだ。もう、一步も登りたくないのに、いづれあの奇峰を越えて行かねばならない。

次のロバの耳は蒲田側を夏径どうりに、登り加減に巻いて行くとジャンダルムとの科尔に出た。20分程前から取付いているパーティが未だ登り切れずにジャンダルムで頑張っている。岳沢側の雪のつまった急なルンゼに1本のトレースがある。西穂側から1パーティだけが登って来たという跡だ。これを下ると再び稜線に戻るのにどれ程、登り返す必要があるのか判らない。しかし俺にはもうジャンダルムを登って行く気力も無い。それにジャンダルムよ、いづれお前の飛驒尾根をやらねばならない。その時まで頂きは残しておこう。

雪壁に近い岳沢側のルンゼに入る。陽が当たって雪はくさり、一步目から腰までもぐる。ピッケルをさしてもブレードまでも、もぐってしまう。全然きいていない。ここでバランスを失うと、止め様がなく、岳沢大滝まで一気に滑り落ちる。もうそれでもいい様な気がする。

登り返すルンゼは早くから日陰になるのか、表面が不完全ながらクラストしている。このクラストの上を歩けるのなら登りもまだ楽だ。ザックの重力をすべて肩で吸収し、足に衝撃を与えぬ様、ソーと上って行くが6歩も進むとズボッと踏み抜き腰までもぐる。一担もぐると、これを抜け出すのが大変だ。その位置のまま、まず足元を踏み固め、ピッケルのシャフトを差してヒザで、次の一步の足場を作る。ひどく体力の消耗する動作の繰返しが続く。

稜線まであと2mというところで、先程ジャンダルムの登りで苦戦していたパーティがジャンの頭から下りてきた。明神の東稜から来たという大阪の大学のOB・現役合同隊の4名だ。彼らも天狗の科尔を目指すという。有難い。これで今夜も、一人淋しい露営にならずに済んだ。

ようやくはい出した主稜線は、ジャンダルムの基部で、岳沢・コブ尾根の頭だ。これで難所は終わった。た易く通過しすぎた感がある。

コブ尾根の頭には大きなテントが設営されている。こんな吹きさらしになる様な所で、前線の通過を待とうというのか。そんなテントを横目に、先程の「大学パーティ」よりも先に出た。蒲田側のガレ場を高度差300mも下って天狗の科尔に着いた。

誰も居ないどころか、テント設営の後さえない。ふらつく足で、岳沢側を整地する。昨夜の様な風は、もうこりごりだ。防風のブロックもしっかり積んでおく。もう陽も落ちたのに「大学パーティ」は、やって来ない。結局、一人淋しい露営となってしまった。

テントのメインの張綱を張り、サイドを固めようとした時、一発の突風にベグが抜け、テントが宙に舞う。幸いピッケルにかけた張綱のせいで、飛び去る事は無かったが、今夜はテントでは耐えれそうにない。急拠、雪洞掘りにとりかかる。にぶい月明りのもとで突貫作業を進める。雪が少なく途中で岩につき当り、三日月状に曲がった洞になった。それでもなんとか全身を伸ばして休めそうだ。テントで入口のフタをし、シート代わりにザックを敷いて、ようやく腰を落ちつけたのは7時をまわっていた。

ローソクの火に黄金色に照らし出された雪洞は、いつ見ても美しい。

壁の雪を削って水を作り、紅茶と白湯だけを腹に流し込む。もう食糧袋のヒモをゆるめる気もしない。

狭く曲がり、坂になった雪洞でも、風の心配はないと思うとグッすり眠れた。



吹雪

12月30日(水) 吹雪

天狗のコル(7:30), 天狗の頭(8:00),

天狗と間ノ岳のコル(8:20),

間ノ岳(9:00), 西穂高(10:30),

西穂山荘(13:00~13:30), 上高地(15:30)

温かい雪洞のおかげで充分眠れた。信じられない事だが、コッフェルの水が凍っていない。

空腹感もなければ、食欲も無いが、口には多少入りそうだ。たっぷりの湯に、即席ぞうすいを半袋と、モチ一切れを入れる。やっぱり、ムツとくるが無理にモチを飲込む。塩のきいたオモユ状の雑炊がうまい。テルモスに甘い紅茶を入れて外に出た。

ホワイト・アウトだ。コルから風下に少し下っているからか、さ程風の強さを感じない。

「大学パーティ」がやって来た。昨夜は30分手前で設営したという。小休止のあと、すぐまた出て行った。

「人生最後の冬山」で雪洞を掘ったのも、何かの縁だろう。

一晩の安眠を与えてくれた雪洞を離れるのが、なごりおしい。

湿った分だけ重くなったザックをかつぎ、今はもう販売されていない、という、なつかしきクライマーズ・ゴーグルをつける。

コルからは、いきなり5m垂直の鎖場だ。20分も前に出て行った「大学パーティ」4名のうち2名がまだ鎖にぶらさがっている。何と遅いパーティか。10m登って「大学パーティ」の先に出る。早くも呼吸がゼイゼイなる。背中を丸めて立ち休止を取る。呼吸を整えながら、

フト思った。慶応尾根から北尾根の5・6のコルに着いた時も、前穂に出た時も、そして今も、すべて後から出て、最終的にはトップを歩いている。単独行ゆえの軽快さとは言え、ザックの重さと歳を考えると、バテて当然だ。20年も山をやっていて、今なお、自分の歩行ピッチを知らないとは、恥ずかしい限りだ。

蒲田側から吹き上げる風が、ホホに冷たい。

視界は10m程きくのだが、ゴーグルが曇って2~3mしか判らない。右に、左に、ルートを捜しながら登って行く。晴れていれば頭上はるかにピークが望め、かえって疲れるのかも知れない。或いは、殆んど手をついて登っている程の急傾斜は、足元はるかにルンゼの底が見えて、恐怖を感じるのかも知れない。

蒲田側ばかりを登って天狗の頭に出、稜線ぞいに間ノ岳のコルに下る。径が岳沢側に廻り込んでいる処は、風が来ないのでほっとする。ザックを置いて休みたいが、それ程、安定したところは無い。

次は、間ノ岳だ。

20年前の事故を思い出す。慎重にこなさねば、と自分にいい聞かす。あの日も今日の様に裂風が吹き荒れ、視界がきかなかったのだろう。ただ今回は、気温が10数度も高いのが、せめてものすくいだ。

先程まで、後ろの方で「大学パーティ」の声が、時折聞こえていたが、もう何も聞こえない。この吹雪の稜線を歩いているのは、俺一人か、と思うと不安になる。

間ノ岳を過ぎる頃から風が一層強くなって来た。ゴーグルの内側に付着する氷を指先で取除

く作業の間隔が短くなる。

もう吹きつける風に、右ホホも冷たいのを通り越して、痛い。

稜線がひどく細くなった来た。

鎖のついた壁状の登り下りが続く。径は主に岳沢側についている。そこは風が凪いでいるが、稜線のナイフ・エッジに出たとたん、突風にバランスを崩しそうで怖い。何も食べていないので下腹に力を入れても踏ん張りがきかない。しかも雪洞を出て、一度もザックを降ろせない。長〜いワンピッチ目が続く。

風が強い。ゴーグルが凍って、何も見えない。このままでは危険だ。森林限界にある西穂山荘まで進めそうにない。どこでもいい、雪洞を掘ってビバークしたい。

ナイフ・エッジを岳沢側から急登すると、やっと西穂高のピークに出た。

風を避けて少しは休止できる何かがあるかと期待してきたが、何もない。今なお、降ろせぬザックが肩にくい込む。

西穂からは一本調子の下りになったが、小鍋谷から吹き上げる風が、増々強い。何度も何度もバランスを崩す。

ピッケルは勿論、ヤッケのポケットのフタでさえ、とがった処に、エビのシッポが付着し始めた。

吹きつける風に、右ホホはもう、痛みさえ感じない。

また岩稜になって来た。

視界がきかない。

ゴーグルに付く氷を指でとる。

径を間違えた様だった。ゴーグルをはずして

肉眼で、ルートを捜す。小鍋谷に落ちる岩稜に入り込んでいた。吹きつける雪に目が痛い。これ以上、肉眼でいるのは無理だ。一番高い所まで登り直す。径は、その小ピークを越えていた。

また下りが始まった。

平な岩の上に行く。余りに強い風にピッケルをついて、背中を丸めて耐える。ギギッ。ギギッ。と全体重をのせたアイゼンが、10センチ、20センチと岩の上を押し上げられる。ギギギギギ。やばい。体ごと吹き飛ばされてしまう。眼の前の岩に必死にしがみつく。恐怖の為か、疲労の為か爆発しそうに、心臓が鼓動する。両手で岩にだきつきながら岩稜を下る。

小さな祠のあるピークに出た。

コウベをたれて、自然と合掌する。

過去、20年間の無事の登山を感謝し、あと二時間風に耐える体力を祈願する。

まだ小休止できぬまま下降をつづける。

少し、地形が変わって来た。岩稜は終り、傾斜も落ちてきた。

ようやく這松が出て来た。這松帯の中に雪の径が続く。その分、足元が不安定だ。風は、更に強く吹き上げて来る。もう、だきつく岩も無い。風がなすがままに倒されるだけだ。

肩にも、下腹にも、足にも、もうどこにも力は残っていない。

這松の根元に、仰向けにブッ倒れる。両手・両足が、だらしなく伸び切っている。

容赦なく蒲側から吹き上げる風は、乾いた雪をパチパチ音をたてて、吹き付けて来る。

森林帯は、もう近いはずだ。

目出帽を出す事も、テルモスの紅茶を飲む事

もできないまま、這いつくばる様にして立ち、
また歩き出す。

広くて雪の、下りの斜面になる。見えた！

雪とガスの白一色の世界に赤い屋根が。ゴー
グルをはずして確認する。間違いない、山荘の
屋根だ。風から俺を守ってくれる森林帯は、も
うそこだ。

西穂山荘でやっと荷物を降した。ピッケルに
雪がこびり付き、ザックも、真白だ。

立っていても、座っても、小屋の土間にゴロ
ッと横になっても、苦しい。腹部には重い圧迫
感があり、いつまでたっても心臓の動悸の回転
は速く平常に戻らない。

温かい紅茶も欲しくない。それでも無理して
飲んだ。そのたった一杯の紅茶さえ、上高地に
下る森林帯の中で、血と共に吐き出した。所詮、
空っぽの、胃液さえ出ない苦しい嘔吐だ。

上高地まで降りて来た。河童橋しか知らない
俺には、そこは上高地のどの辺りか判らない。
ただ梓川の流れの音を聞いていると、我娘「梓」
がそばに居る様な安堵感がある。

人に迷惑をかけずに無事に降りて来られた感
謝の気持ちだが、こみ上げる。

ザックをほどくのになえ、呼吸が乱れる程、
ボロボロになりながら最後までやり通したとい
う喜びが強い。

昂奮がある。しかし、ここまでは、意志が体
を動かして来た。今は意志を殺し、静かに体を
やすめてやる。

コンロに火をつける事もなく、シュラフにも
ぐり込んだ。

